
5月11日 弟子たちを派遣するキリスト 教理説教のための聖書黙想

テキスト

マタイによる福音書 28章16～20節

参照教理問答

子どもカテキズム 問10

ウェストミンスター小教理問答 問6, 94

〈聖書テキストの解説と黙想〉

①大宣教命令

マタイによる福音書の最後の段落は「大宣教命令」とよばれる箇所である。キリスト教会はイエス・キリストの昇天から2000年以上にわたって宣教活動をしてきた。キリスト教会が宣教(伝道)を行うのは自らが救われた恵みを人々に伝えたいという内的な動機に基づくことはもちろんであるが、その一方でイエス・キリストの厳粛なご命令であることを忘れてはならない。命令というとき重く感じるかもしれないが、「すべての民をわたし(キリスト)の弟子に」(19節)することはキリストの願いである。弟子になるための具体的な方法として、洗礼を授けることをキリストは定めたもうた。その洗礼は、父と子と聖霊の名によって授けられる。この三者(三位格)による神の存在形態を教会では長い間、三位一体と呼んできた。聖書によって啓示されている神様は三位一体の神である。そして、三位一体なる神はご自身において交わりを持っている。言い方を変えるならば、神は決して孤独ではないのである。父・子・聖霊なる神は交わりを持っておられ、人間に対しても交わりを求めておられる。洗礼を受け、弟子になるということは一方的な上下関係に入れられるのではなく、神様との交わりに入れられるということにはかならない。こうして、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」というキリストの約束が現実のものとなる。このように、大宣教命令とは、ただ一方的に神を信じるように人々に伝えなさいという扇動ではなく、父と子と聖霊なる神の交わりの中に入りなさいという恵みの招きなのである。そして、交わりに入れられたものは聖霊がキリストによって送られたように、この世界へと派遣される。使徒言行録は、いふならば聖霊によって派遣された弟子たちの物語であり、その物語は今現在も教会の物語として紡

ぎだされている。

②聖書解説

○16節

16節によれば、11人の弟子たちは復活の主に会うためにガリラヤに集合していた。これは、主イエス自ら最後の晩餐の後に弟子たちに向かって「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」(マタ26:32)と予告していたことを受けてのことであろう。そして、ガリラヤの山に登った。山はマタイ福音書において重要な言葉である。イエス・キリストがご自身の権威(7:29)によって教えた説教は山の上からなされたものであった。また人々を癒し、四千人に食べ物を与えたのも山の上からであった(15:29)。栄光の姿に変貌されたのもまた山の上であった(17:1)。このように、主イエスは山の上からご自身の栄光をあらわされた。山は一つのしるしである。そして、主イエスは天に昇られる前にまたしても山の上から弟子たちに語りかけた。それは、山上の説教のように、弟子たちに与えられた主イエスからの権威ある教えであった。主なる神は、モーセにシナイ山から契約の書(十戒)を授けた(出19:3)。どのように、キリストもまた弟子たちに神の約束を授けたのである。

○17節

不思議なことに、山にまできてそして実際に復活のキリストと面会してひれ伏して(礼拝して)いるのに疑うものがいたという。もちろん11人の弟子たち全員が疑っていたと考えることはできないが弟子たちの中に疑いの心を持っていた者がいたことは間違いない。疑うとは、「2つ」という意味の言葉であり、心が半信半疑の状態のこと。生前自らの復活について弟子たちに3回にわたり予告してきたが、そうした弟子たちでさえ復活を信じることは容易ではない。

○18節

疑う弟子たちもいたが、そのような弟子たちに主イエスご自身が近づいてくださった。疑いの中にいたとしても、キリストがいつも近づいてくださり、助けてくださる（マタ14:22~33参照）。疑うとは、キリストを完全に信じることができないことである。これは、キリストと距離があるということ。その距離を埋めることができるのはキリストがこちらに近づいてくださり、手を差し伸べてくださるからである（14:31）。キリストは疑う弟子の近くによってくださり、厳かに宣言なさる。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」。天と地とはヘブライ的表現である。2つの極端を並べて、一つ概念をしめす（天と地、善と悪など）。天と地という言葉であらわすのは全世界ということであろう。天と地という言い方はマタイ福音書では16:18以下及び18:18に登場する。権能は力であり、ことがらを実現させる力である。主イエスは権威あるものとして教えた（7:29）。律法学者やファリサイ派がいわば律法の権威にしばられていたのに対して、キリストはご自身の権威で人々に教えたのである。そして、主イエスは地上で罪を赦す権威を持つ（9:6）。キリストの権威の上に建てられた教会は陰府の力（死）も対抗できない。このように、マタイ福音書はイエス・キリストというお方が、天と地の一切の権能を持っているお方であると証ししている。それはご自身の権威で教え、罪を赦し、死に打ち勝つ力である。

○19節

「すべての民」とは諸国民のこと。全世界の権

能をお持ちのイエス・キリストから、全世界に派遣されるのである。「父と子と聖霊の名による洗礼」の意味については本稿①を参照されたい。この文言は新約聖書中においてこの箇所しか見られない言い方である。プロテスタントでは、礼典とよばれる儀式を洗礼と聖餐の2つに定めた。洗礼の制定句としてもこの箇所は重要である。

○20節

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という句に注目する。マタイ福音書においては冒頭の1章23節で「神は我々とともにおられる」すなわち「インマヌエル」の誕生が予告されている。さらに、キリストはご自身の名によって集まる時には共におられると約束してくださり（18:20）、そして最後に世の終わりまでキリストが共にいてくださると語られた。こうしたインマヌエルの出来事が、神との交わりに生かされるときに起こるのである。

〈子どもたちに対して〉

教会学校に集う子どもたちの多くはクリスチャンホームの子弟として育っていると思われる。そうした子どもたちにとって、神様がいるということは当たり前のことかもしれない。しかし、幼児洗礼を授けられ、教会において育てられているということは父・子・聖霊なるお方との交わりに入れられていることを忘れてはならない。このお方との交わりに生かされ、世界へと派遣されていく。それが、キリストの弟子としての使命である。

（小宮山裕一）



5月11日 弟子たちを派遣するキリスト 説教展開例

テキスト マタイによる福音書 28章16～20節
子どもカテキズム 問10

〔単元のねらい〕

いわゆる大宣教命令の箇所であり、マタイによる福音書の締めくくりの箇所である。弟子たちは復活のキリストにまみえ、聖霊をうけ、世界へと散らばった。これは罪の赦しのためにこの世界にキリストが派遣されたこと、救いの実現のために聖霊が派遣されたことに通じるものである。キリスト者はこの世界に派遣される。それは狭い意味での伝道をするためではない。この世界においてキリストの証人として世の終わりにいたるまで歩むのだ。子どもたちには、そうした派遣意識の根底にあるいつも共にいるキリストというメッセージを心に刻んでもらいたい。

いつも共にいてくださるイエス様

今日は、復活されたイエス様のお話しをしたいと思います。

イエス様は、十字架につけられて3日後に復活しました。新しい肉体をもって、再びお弟子さんたちの前にあらわれたのです。お墓のそばで2人の女性の前に現れ、部屋の中に現れてくださったのです。そして、40日間お弟子さんたちと過ごしました。そして、最後にイエス様はお弟子さんたちをガリラヤに集めて、とても大切な約束をお弟子さんたちにあたえたのです。そして、イエス様は天に昇られました。実は、イエス様は前もってはっきりとガリラヤでお弟子さんたちに会うこととお語りになっていたのです。「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」(26:32)。さらに、復活なさったとき、み使いによっても同じことが告げられています。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかる」(28:7)。

お弟子さんたちは約束を信じて、ガリラヤの山に登ります。そして、復活されたイエス様が目の前に来てくださったのです！お弟子さんたちの反応はどうでしょうか。3つの反応があると思います。復活したイエス様と会うことができたという喜びの反応。本当にこのお方が復活したイエス様だろうかという疑いの反応。そして、イエス様

の弟子だという理由で人々から迫害されないだろうか、という不安に思う反応。この3つです。それぞれのお弟子さんたちが、心の中で、喜びや不安を持っていたのです。お弟子さん達が不安に思っていたのも無理はありません。エルサレムに入られてから、逮捕、逃亡、裁判、十字架という死刑、そして復活と、短い間にさまざまなことが起こっていたからです。頭の中は混乱していたでしょうし、生きた心地がしなかったのではないのでしょうか。そのようなお弟子さんたちに、イエス様はご自分から近づいてくださったのです。

イエス様は、お弟子さんたちに最後のメッセージを語ります。そのメッセージはお弟子さんたちの心をうれしくさせました。そしてお弟子さんたちの心を温かくするものです。それは、イエス様が「わたしは世の終わりで、いつもあなたがたと共にいる」とお語りになったからです。この言葉をどこかで聞いたことがないでしょうか。それはクリスマスの時のお話です。「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」(マタイ1:23)。聖書は最初から、イエス様がこの地上に来てくださったのは神様がいつも私たちと共にいてくださるといふことのしるしだと伝えていきます。人間は神様から離れてしまうこともある。しかし、神様は決して

信じるものから離れることがない。いつも共にいる。これが神様からの約束です。

さて、お弟子さんたちこのイエス様の言葉を受けてあちこちに出かけて行ってイエス様のことを宣べ伝えました。それは、使徒言行録を読むと、お弟子さんたちが大変な目に遭いながらも一生懸命イエス様を伝えていたことがわかります。お弟子さんたちはイエス様のことを知らないといったり、イエス様の言葉をちゃんと理解できなかったり、決して完璧なお弟子さんではありませんでした。そんなお弟子さんたちが、あちこちに出かけていっていろんな人からいじわるをされてもあきらめることなくイエス様を伝えたとすることは驚くべきことです。どうしてお弟子さんたちはそんなにかわってしまったのでしょうか。それは、イエス様が復活してくださり、いつも一緒にいるという約束を心から信じたからです。だからこそ、イエス様のことを大胆に宣べ伝えることができたのです。そして、実際に、イエス様はお弟子さんたちに必要な助けをいつもくださったのです。

私たちは実際にこの目でイエス様を見たわけで

も、イエス様から直接に御言葉を頂いたわけでもありません。しかし、いつもイエス様が一緒にいてくださるといふ約束は今を生きる私たちにとっても重要です。イエス様は、天に昇られて、そして聖霊なる神様を私たちに送ってくださいました。

聖霊は私たちといつも一緒にいてくださり、イエス様と一人一人をつなげてくださるお方です。このお方が助け主として私たちに与えられています。

お弟子さんたちが力強くイエス様を証したように、この聖霊なる神様にあってイエス様の約束は実現したのです。そして、聖霊なる神様の力によって私たちもまたキリストの弟子として歩むことができるのです。

イエス様は天と地の一切の力をもっているお方です。このお方がいつも私たちと一緒にいてくれる。この約束を心から信じましょう。そしてお弟子さんたちがイエス様から遣わされたように、学校や友だちのところに、遣わされたいと思います。

(小宮山裕一)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章20節

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。



〈ねらい〉

イエスさまは、いつも私と共にいてくださるお方であることを知る。

〈展開例〉

「神さまはあなたと共にいる」という言葉は、教会の中でよく聞く言葉の一つです。また、「私と共にいてください」というふうにお祈りの言葉にしている人も多いことでしょう。大きくなるにつれて、大人たちから「このくらい一人でやりなさい」「甘えるな」と厳しい言葉をかけられることがあります。そのような中で「あなたはひとりぼっちではないよ。イエスさまがいつも一緒だよ」と聞くと、「自分は見捨てられていないのだ」「一緒に手を取って歩いてくださる方がいるのだ」と思って安心することができるのです。

このとき、弟子たちは皆、イエスさまの復活を信じてきていたわけではありませんでした。復活したイエスさまにお会いし、ひれ伏して、礼拝を捧げながらも、なお「疑う者もいた」というのです。でもそういう弟子たちのもとに、ここでもイエスさまご自身の方から「近寄って来て」くださったのです。かつて弟子のひとりペトロは、ガリラヤ湖の上で、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」とイエスさまから叱られました。「安心してわたしのもとに来なさい」というイエスさまの言葉を信じて湖の上を歩いて渡り切ることができなかつたのです（マタイ14:22～33）。イエスさまの招きの声を聞いて、イエスさまのもとに向かうその道の中で、様々なことが起こります。ペトロが湖の上で、強い風が気になって沈みそうになったように、私たちも自分を支配しようとする大きな力が気になって溺れそうになるのです。どれだけイエスさまの恵みを知っても、なかなか自分の足でイエスさまのところに行くことができな自分がかかりすることも少なくないでしょう。

でも、そんな私たちに手を伸ばしてくださる方がいます。近寄って声を掛けてくださる方がいます。それがイエスさまです。私がイエスさまのところに行けなくても、イエスさまの方から私のところへ近づいてくださる。だから私たちはイエスさまと共にいることができるのです。そしてイエスさまは宣言されます。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」と。「神さまがお造りになったこの世界の中でいちばん力を持っているのはわたしだ」とそうおっしゃるのです。

私たちが生きている世界には色んな力や権威があり、その下で生きています。自分のコンプレックスや悩み、あるいは神さまのことがなかなか信じられないという思いなども、私たちを支配する力の一つでしょう。でも、この世のどんな力も、自分の中にあるどんな力も、罪も死も、イエスさまの力に勝つことはできません。

この復活のイエスさまの力に支えられて、歩むことができます。その中で疑うことがあるかもしれませんが、でもがっかりしないでください。こんな自分では、きっとイエスさまに叱られるから、「もう教会なんか行かない」なんて言わないでください。信じられなければ、信じられないままでよいのです。疑ってもよいのです。その自分の心のままで、「教会で会おう」と招いてくださるイエスさまのもとに来てください。そうやって、イエスさまの招きの声を聞き続ける時に、「イエスさまは共にいる」ということが分かります。それも教会に行く日曜日だけではなくて、学校や家での生活の中にも、イエスさまが共にいてくださることを知るようになるのです。

〈祈り〉

どのようなときも、イエスさまが共にいて、助けてくださることを感謝します。これからも、神さまの声を聞き続けることができますように導いてください。

〈展開例〉

1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」 マタイ28:20b

- ・4月27日の分級展開例の「1. 今週の暗唱聖句を一緒に読みましょう」参照。

2. 説教を分かち合う。

2-1. イエス様のことを考えよう。

- ・イエス様は天に昇りました。天に昇ったということは死んだということですか？
- イエス様は生きてそのまま、天に昇られました。今も天において生きて働かれておられます。
- ・イエス様が天に昇る前にお弟子さんたちに最後に命じたことは何ですか。
- すべての民をイエス様に従う弟子とすること。そのために、父と子と聖霊の名によって洗礼をさづけ、お弟子さんたちに命じていたことをすべて守るように教えること。
- ・イエス様が地上にいる間にお弟子さんたちに命じておいたことは何がありましたか。
- ・イエス様は、「世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる」と言ったのは、大丈夫だよ、と言っているんですね。じゃあ、何が大丈夫だよとっているんでしょうか。
- それは、世界へ出て行ってイエス様をお伝えすることです。そのことを、「すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに……教えなさい」と言っているんですね。そうできるようにイエス様は、「大丈夫だよ、わたしがついているよ」と教えてくださっています。
- ・先生は幼稚園の頃、スイミング教室で、足の届かない深いところに、一人ずつとびこまないといけない時がありました。先生がプールの中から「ちゃんと助けるから大丈夫」といってくれたので、恐かったけど勇気をもって思い切って飛び込みました。足はつかないけども、ちゃんと水から引き上げもらいました。繰り返して飛び込む内に、「ちゃんと助けてくれる」とい

う信頼感がどんどん強くなっていきました。

みんなは、どうでしょう。自分では恐いと思っただけでそばにいた大人や友達たちが助けてくれたことはありますか。

2-2. お弟子さんたちのことを考えよう。

- ・お弟子さんたちは、すべての民を自分の弟子ではなくイエス様の弟子にしなさい、と言われました。この違いは、どんなところに表れますか。
- 自分の言葉を伝えるか。イエス様の言葉を伝えるか。
- ・イエス様が天に昇られてしまいましたが、その後、お弟子さんたちはイエス様の力強い働きを経験しました。それは何ですか。
- イエス様が送られた聖霊が注がれて、イエス様の御業を力強く語ることができるようにされました。

2-3. 私たちのことを考えよう。

- ・イエス様のことを誰かにお伝えしたくても、不安になることがあるかもしれない。どうしたらいいだろうか。
- お弟子さんたちのように、私たちも聖霊に満たされるように祈りましょう。聖霊は、イエス様がなされたことや教えてくださったことを私たちも力強く語れるように励ましてくださいます。
- ・イエス様は私たちと共にいるのですか。
- イエス様は、送られた聖霊を通して私たちと共におられます。イエス様の力が聖霊を通して私たちに注がれるのです。だから聖霊の導きを求めて祈りましょう。聖霊はイエス様の言葉を思い出させてくださいますし、その意味が分かるように助けてくださいます。

3. ゲーム

100円均一のダーツ。点数の付け方を大人はちゃんと勉強してきちんと教えて上げる。